

令和4年度分 浜松市博物館事業評価

1 浜松市博物館運営についての考え方と事業評価

浜松市博物館では、図1のとおり、博物館の使命（ミッション）を「浜松市域の文化の継承と創造」として、3つの中短期目標（令和7年度まで）を定めた上で、それらを実現していくために必要な戦略指標を6つに分類して設定しています。

その戦略指標の達成状況を測るための事業評価について、今回は令和4年度分を実施します。また、併せて令和5年度分の評価項目や目標値などの確認を行います。

2 事業評価の方法

1～5の戦略指標ごとに、定量的評価と定性的評価の項目を定めた評価シートを作成しています。定量的評価については評価項目ごとに目標値と実績値を示し、定性的評価については、評価項目ごとにA～Dの4段階で当館の自己評価を行っています。

第1回協議会（前回） 令和4年度の事業報告と併せて評価シートを提示し、説明します。

各委員におかれましては、今回の説明を踏まえて、第2回協議会までの間に、各指標の定性的評価の4段階評価と、各評価シートに対する意見等のコメントをお願いします。

第2回協議会（今回）

協議会委員による評価・意見等を会議の事前に取りまとめ、今後の事業改善策や取り組みについて説明して意見をうかがいます。

第3回協議会（次回）

前2回の協議を反映して作成した令和6年度事業評価の項目や目標値等について意見をうかがいます。

本館における事業評価は開始から間がなく、まだ評価項目や目標値の設定等に修正の余地が残されています。各種事業の改善に有効な事業評価となるように、今後も博物館協議会等の意見を受けながら絶えず見直していきます。



図1 浜松市博物館運営についての考え方

事業評価のスケジュール

年度	月	協議会	内 容		
			令和 4 年度事業評価	令和 5 年度事業評価	令和 6 年度事業評価
令和 4 年度	2 月	第 3 回		・ 事業計画案提示	
	3 月				
令和 5 年度	4 月				
	5 月				
	6 月				
	7 月	第 1 回	・ 事業報告 ・ 評価シート提示	・ 事業計画 ・ 目標値等確認	
	8 月		↓ 各委員の評価・意見 (第2回の前に提出)		
	9 月				
	10 月	第 2 回	・ 評価のとりまとめ ・ 改善策の検討		
	11 月		反 映		
	12 月	第 3 回			事業評価の項目や目標値(案)の検討
	1 月				
	2 月				
	3 月	第 4 回			・ 事業計画案提示 ・ 評価シート確認
令和 6 年度	4 月				
	5 月				
	6 月				
	7 月	第 1 回		・ 事業報告 ・ 評価シート提示	・ 事業計画 ・ 目標値等確認

令和4年度博物館事業評価

戦略指標1 資料収集と保管・活用

・地域を特徴づける資料収集と保管 ・資料データ化と収蔵資料の充実 ・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R4 目標値	R2 実績値	R3 実績値	R4 実績値	考え方・基準	R4内訳等説明
1	新規受入資料件数	件	20	38	27	17	当該年度の受入件数	歴史9件・民俗7件・美術工芸1件。目標未達成だが、収蔵容量を踏まえて受入資料を厳選した結果であり想定内の結果である。
2	収蔵資料台帳のデジタル化件数(累計)	件	85,600	82,737	85,555	88,916	年度末におけるデジタル台帳の登録件数 (中期目標:R7年度100,000件)	資料紛失に係る本館資料全点確認作業の中で、一括登録資料の個別での再登録や、未登録資料の新規登録を進めたことで、目標を大きく上回った。
3	新規受入資料の公開率	%	50	-	31	26	当該年度とその前年度の受入資料のうち、展示、刊行物、オンライン上などで紹介した件数の比率	受け入れ後に、目録作成等の整理や修繕を要するなど、早期に公開できない資料が一定量存在したため、目標値を達成できなかった。
4	収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数(累計)	件	12,125	11,971	11,992	12,004	年度末時点における「ある蔵」での公開件数 (中期目標:R7年度12,500件)	本館資料の全点確認作業を優先して実施する中で、個々の資料の公開情報の充実を重視したこともあり、目標値を達成できなかった。
5	館内収蔵庫の点検・清掃回数	件	12	-	12	12	温湿度等環境の点検及び庫内清掃の回数	温湿度の点検を月に1回行い、適宜除湿、放熱、清掃等を実施した。
6	資料事故発生件数	件	0	0	6	0	資料の紛失、破損、汚損等の件数	

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R3 自己	R3 委員	R4 自己	R4 委員	判断基準	自己評価の理由等
1	計画的な資料収集が行われている。	A	B8人	A	見直し 必要1 不要6	資料収集方針・資料購入基準に基づいている。	方針・基準に基づき収集した。
		B		A		現状の収蔵環境を踏まえながら、収集検討会議により受入を決定している。	収集検討会議を毎回開催し、記録を残した。
		B		A		資料購入評価会の構成員をあらかじめ想定し、すぐに対応できるようにしている。	資料購入評価会の開催案件は無かったが、博物館協議会や文化財保護審議会経験者を中心に、候補者を想定して備えることができた。
2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	B	C4人 D4人	B	見直し 必要6 不要1	資料管理のフローチャートが運用されている。	概ねフローチャートに沿って行われた。
		B		A		収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われている。	・鍵は施錠式キーボックスに収納し、使用時は他者の確認を必須とし、閉館時に有無を確認した。 ・機械警備は夜間全館、通常時は収蔵庫で行った。
		D		C		資料の収蔵場所を明確にするとともに、その場所への収蔵が確実にされている。	使用した資料の原位置への収納を複数人による確認で行ったが、以前から原位置以外に置かれている資料の復旧は途上である。本館の全点確認作業の中で適切な配置を模索中である。
		C		D		全ての収蔵施設におけるデジタル台帳作成が計画的に行われている。	本館の全点確認作業を優先する中で、外部収蔵施設のデジタル台帳作成を一時中断しており、進められていない。
		C		B		収蔵庫の温湿度計測を常に 行い、必要な措置を講じている。	空調設備が整っていない中でも、常に温湿度を計測し、必要に応じて扉の開放やサーキュレーター、除湿機の使用等によって、できる範囲の対応を行った。今後の博物館リニューアルの中で、設備の整備を重要課題として取り組んでいく。

3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	C	C4人 D4人	C	見直し 必要5 不要2	全ての収蔵施設について毎年現地地点検を行い、必要な措置を講じている。	年間通じて一度も行けなかった施設が複数存在した。
		D		D		C6人 D1人	全ての収蔵施設の資料を把握し、将来的な再配置の方針が検討されている。
4	収蔵資料の活用と見直しが図られている。	B	B3人 C5人	B	見直し 必要3 不要4	デジタルデータの公開活用が推進されている。	「ある蔵」や「文化遺産デジタルアーカイブ」で推進しているが、利便性に改善の余地がある。
		C		C		未整理資料や再整理を要する資料の活用に向けた確認・整理作業が推進されている。	伊場遺跡群弥生時代資料の再整理などを進めたが、未着手のものが多い。
		A		A		B5 C2	他館への資料貸出や画像提供、資料熟覧への対応が適切に行われている。

自己評価

分析課題	<ul style="list-style-type: none"> 【収集】収集方針・購入基準に沿って行い、収集検討会議も経緯や理由等を記録した資料を残すなど適切に行われた。 【保管】鍵の持ち出しや資料を戻す際に他者の確認は適切に行われた。一方、収蔵庫の飽和状態は慢性化し、外部収蔵施設は環境・保安面の課題を抱えるが、再配置の具体化は今後の検討である。 【活用】 デジタルデータの公開活用をさらに推進していく必要がある。また、活用に向けた資料整理も未着手のものが多いが計画的に進めていくべきである。
------	---

博物館協議会からの意見・評価

<ul style="list-style-type: none"> 資料の整理と公開は密接に係わっている。市民が全ての収蔵資料にアクセスできるように、環境を整えることは極めて重要な課題と認識している。一朝一夕に資料の整理と公開はできないが、収集・管理(保存)・公開とコレクション・マネジメントの視点から、予算・人員の確保と投入を市の政策として真剣に議論し、取り組んでもらいたい。 博物館の努力や工夫で解決、または改善する問題と、そもそも予算が不足していて、問題が起きているものとを分けるか、予算請求において、スクラップアンドビルドなどの方策を検討するかなどをして、現実的に進めていく方がよいのではないかと。 本館および分館施設の現状を考えると、まずは本館の全点確認作業、原位置への復旧、デジタル台帳の作成などが最優先ではないか。「年間通じて一度も行けなかった施設が複数存在した」というのは問題ではないか。そのための人的、労力的な負担が大きいとすれば、新規受入をいったん停止するか、停止に近い状況にまで減らすなど、優先事項についての抜本的な見直しが必要ではないか。 博物館の収集方針を、ホームページで公開し、また寄贈を募る際も欲しい物(年代、具体的な品名)を明示することにより、収蔵品を限定することにより館の特色を作り出すとともに、評価会のメンバ、収蔵の可否を決めやすくなり、研究等の時間を創出することにつながるのではないかと。 必要な設備に関しては、予算措置がなされるよう努力していただきたい。 資料の保管運用に必要な人的資源が十分でなければ、増員が可能なように、予算措置を検討していただきたい。 2について: 資料の保管はまだ目指すところにはたどりついていないとのことですが、着々と進んでいるのを感じます。 3について: 他施設に手が回らない状況は理解いたしますが、スケジュールに組み込むことは不可能でしょうか。同時に他施設も見直すことでロスが減るのではないのでしょうか。 資料収集方針・資料購入基準に基づいた資料収集がなされていることは評価できる(定性1)。空調設備がないことは努力しようがないので、評価項目としては不適切であるように思う(定性2)。

今後の方策

<ul style="list-style-type: none"> 【収集】 <ul style="list-style-type: none"> 引き続き、収集方針・購入基準に従って、検討会議を行った上で、地域の歴史や民俗の理解に必要な資料を収集する。 現状で飽和状態にある収蔵庫の状況を踏まえ、調査研究や展示公開等の活用資するかどうかの判断を慎重に行う。 【保管】 <ul style="list-style-type: none"> 資料の適切な位置への再配置を図るほか、必要に応じて除籍(移管や処分)を進める(本館分から開始)。 未整備分のデジタル台帳化を進めるとともに、デジタル台帳内の情報の充実化を図り、実用的なシステム運用を目指す。 展示や貸出に供した資料は、原位置へ復することを複数人で確認することを徹底する。 本館以外の外部収蔵施設は、令和5年度に全て現地で現状把握を行った。今後も各地域の職員と連携して定期的な状況確認を行い、資料の点検を順次進めていく。併せて将来的な再配置の検討を進めていく。 【活用】 <ul style="list-style-type: none"> 「ある蔵」の内容充実と利便性向上に努めるとともに、外部デジタルアーカイブとの連携を高め、公開活用の促進を図る。 新収蔵資料や再整理を行った資料については、「ある蔵」や刊行物等を通じて可能な範囲でその情報を紹介していく。
--

戦略指標2 調査研究

・学芸員の質の向上 ・地域の研究機関との共同研究 ・地域資料の掘り起こし

定量的評価

No.	内容	単位	R4 目標値	R2 実績値	R3 実績値	R4 実績値	考え方・基準	R4内訳等説明
1	学芸員が講演・講座等の講師を務めた件数(外部での実施を含む)	件	15	-	12	19	当館学芸員による講師件数。ギャラリートーク、学校対応、展示ガイドは含めない。出前講座は含む。連続講座は1回。	展示関連講座9件(古墳2・新指定・蜷塚2・家康伝承4)、連続講座2件(家康伝承調査・初歩の古文書)、出前講座4件(原始古代2、地域史、家康伝承)、外部依頼4件(原始古代2、地域史2)
2	学芸員の学術的著述本数(外部での掲載を含む)	本	3	-	3	6	館報・図録・報告書や、外部研究誌等へ記名の著述掲載本数。連載は1本。1人1本目標。	学芸員A:2本(外部・館報)、学芸員B:3本(図録・館報2)、学芸員C:1本(館報)
3	学芸員が調査に向いた件数	件	20	-	24	27	外部での資料調査、熟覧、視察など。同一調査に複数回でも1件。	歴史20件、民俗5件、考古2件 ※特別展(家康伝承)関連が多い。
4	他機関と連携した調査研究の件数	件	6	-	6	5	大学、機関、研究者等との調査研究連携件数。イベント等のみは含まない。	静岡文芸大(染色型紙)、静岡大2(滝沢鍾乳洞・蜷塚遺跡)、根堅遺跡調査団、大橋幡岩資料調査プロジェクト(大橋ピアノ)

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R3 自己	R3 委員	R4 自己	R4 委員	判断基準	自己評価の理由等
1	市役所の組織の中で、博物館が調査研究施設として位置づけられている。	C	C6人 D2人	C	見直し 必要5 不要2 B1 C6	調査研究とその他業務における適切な業務量のバランス配分と役割分担がされている。	調査研究の必要性は以前よりも共有され、他の業務との配分も一定の改善はみられたが、より定着化を進める必要がある。
2	調査研究の環境が保たれている。	D	B1人 C4人 D3人	C	見直し 必要6 不要1 C6 D1	調査研究に必要なスペースが確保され、機材が適切に配備されている。	館内の資料や物品の整理を進めたが、調査研究スペースは十分ではない。機材の更新は未実施だが準備を進めた。
		C		C		調査研究スペースにおいて整理・整頓が日常的に行われている。	調査研究スペース確保のための整理・整頓の実施は継続中である。
		B		B		調査、視察、研修、有識者指導など学芸員の資質向上に必要な予算が確保されている。	図書購入費や出張費等の予算はおおむね確保されていた。
3	博物館が市民や外部の組織などから調査研究施設として位置づけられている。	C	B3人 C5人	B	見直し 必要2 不要5 A1 B4 C2	設定されたテーマに基づいた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している。	「家康伝承」は特別展、冊子、講演等によって市民に還元を図った。「伊場遺跡の弥生時代資料」「蜷塚遺跡」はいずれも調査研究途上であるが、展示、講座等で情報を提供し、伊場遺跡については図録を刊行した。
		B		B		学芸員が外部機関との共同研究に参画している。	「機械染色の型紙」は大学側と覚書を締結して整理作業や展示等を行った。

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none"> 学芸員が行政的な業務等も抱え、調査研究スペースも十分ではない中でも、調査研究の重要性についての共有は図られてきた。講座や学術的著述、資料調査は精力的に行われた。 「家康伝承調査事業」については成果を展示や冊子、講演等で市民へ還元した。その他「蜷塚遺跡」「伊場遺跡群」、静岡文化芸術大学との「浜松の染色の型紙」共同研究など継続中の調査研究については、タイミングを見ながら成果を公開していく。 外部機関との連携した研究は行われているが、資料の提供が中心になりがちである。
-------	---

博物館協議会からの意見・評価

- 学芸員が学芸業務に専念できるような事務方職員のサポート体制の構築、業務分担の見直しや専門分業化の導入など、中長期的に学芸員の人事ローテーションや雇用体系について議論してもらいたい。
- 学芸員が行政的な業務と同時に調査研究を行うことに負担が大きく、博物館の努力や工夫で、課題が解決または改善する問題ではない。他地域の同規模の博物館や類似施設などの状況を調べるなどして、学芸員が調査研究に集中し、研究成果を広く発信できる環境を整えることは必要である。そのような取り組みが、博物館の地位向上や市民への還元につながるのではないかと。
- 学芸員による講演、講座、著述、調査などは数値的にも改善が見られ、博物館が研究施設であることの意識が共有されてきていると思われる。しかし、調査研究の環境としてはさらに整備・向上が必要ではないか。必要な予算の確保について自己評価はBとされているが、他の自治体(とくに政令指定都市クラスの自治体)と比較して、はたして十分と言えるのか気になるところである。なお、定量的評価については「学芸員の学会・研究会への出席数」を示していただきたい。
- 浜松市として、博物館を調査研究施設として今まで以上に活用するためには、展示を含めた博物館の方向性(どの時代に特化するのか等)を決定し、学芸員を専門職として採用し、十分な予算と時間とスペースを配分することが重要であると考えます。
- 機材の更新については、予算措置が不可欠であろうから、しかるべく準備をしていただきたい。
- 2について:現場を拝見していないため自力で改善できる問題なのかどうか判断がつかいかねますが、スペースが十分ではないという自己評価を拝見しCとしました。
- 市役所の組織の中で、博物館を調査研究施設として位置づけられているのか、もう少し具体的にいうなら、学芸員等が調査研究を行うことをきちんと認識し適切な対応をしているのかよくわからないので、文化財課との関係の中できちんと確認していただければと考える。
- 調査研究施設としての位置づけや調査研究スペースが十分ではないことは博物館としての努力で何とか出来ることではないように思うので、指標を見直す必要があるのではないかと(定性1, 2)。

今後の方策

- 引き続き館内・課内での適正な業務分担と館内の環境整備を進め、学芸員が調査研究等に注力できる状態を目指していく。
- 学芸員に対し、外部の研修や研究会、資料調査、先進地視察、他機関との共同研究等を推奨するとともに必要な予算を確保していく。また、それを市民に還元する場として講座や学術的著述の積極的な実施を促していく。
- 学芸員の人事のあり方については、庁内で協議・検討を進めていく。

戦略指標3 展示・教育普及活動

・浜松市と関連のある展示の企画 ・学校や地域と連携した講座やイベントの開催

定量的評価

No.	内容	単位	R4 目標値	R2 実績値	R3 実績値	R4 実績値	考え方・基準	R4内訳等説明
1	年間観覧者数 (本館)	人	35,000	24,032	29,311	31,547	本館合計(アウトリーチを除く)	目標値未達成だが、新型コロナの影響から回復傾向にある。
2	年間観覧者数 (分館合計)	人	25,000	18,108	21,762	22,859	5館合計	目標値未達成だが、新型コロナの影響から回復傾向にある。舞阪5,048人、姫街道と銅鐸資料館3,981人、浜北12,047人、春野1,190人、水窪593人
3	企画展開催件数	件	6	8	7	8	特別展、テーマ展、小展示が対象(スポット展示や外部での展示は含めない)	特別展1件、テーマ展3件、小展示4件
4	企画展の満足度	点	7.5	-	7.5	7.7	特別展・テーマ展におけるアンケートでの平均値(10点満点)。展示毎に算出し、その平均値。	特別展(三方ヶ原の戦いと家康伝承)8.1、新指定文化財展7.8、蜷塚遺跡7.5、家康伝承と浜松7.5
5	分館における 企画展開催件数	件	12	13	18	23	本館巡回展や企画展のほか、分館の所管部署や指定管理者主体の展示も含む。	本館主体14件、分館主体9件
6	講座開催件数	件	10	-	9	14	館主催講演会・講座の回数。ギャラリートーク、出前講座は含まず。連続講座は1回。	展示関連講座12件(うち講演会2件)、連続講座2件
7	体験事業の 満足度	点	95	-	99	9.3	学校長期休暇時の体験学習のアンケート平均値(10点満点)。事業毎に算出し、その平均値。 ※年度途中より10点制に変更	GW:未計測、夏9.1、冬9.4、春9.4
8	学校移動博物館 (職員派遣型) 開催件数	件	6	8	10	9	学校へ博物館職員が出向く形での展示・体験学習の実施件数。	篠原、与進北、芳川、上阿多古、豊岡、可美、和地、西気賀、伊佐見の各小学校で開催。
9	教材貸出件数	件	100	101	99	94	学校等への教材用資料や体験学習用具の貸出件数。	わずかに目標値に満たなかった。学校移動博物館(貸出型)61件、それ以外の貸出(個別資料、体験道具等)33件
10	各種研修生の 延べ受入人数	人	100	145	77	161	博物館実習、インターン、職場体験、教職員研修などの延べ人数。	博物館実習108人(18人×6日)、職場体験20人、教職員研修23人、インターン10人(2人×5日)。
11	常設展内の 資料更新回数	件	4	-	2	5	常設展の部分的な展示更新の回数(期間限定の逸品展示を含む)。	中世3回、縄文1回、全体のパネル・キャプション修正
12	レファレンス 対応件数	件	45	-	31	80	来館、メール、電話等による件数合計。	うち特別展・徳川家康関連問い合わせ 29件

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R3 自己	R3 委員	R4 自己	R4 委員	判断基準	自己評価の理由等
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市を理解し、知的好奇心を満たすことができる場である。	D	B4人 C4人	D	見直し 必要2 不要5 B7	常設展の魅力向上に取り組むとともに、UD化を進めている。	中世中心に修正や配置変更を行ったが、音声ガイドなどのUD化は展示内容の更新を控えており、その後の予定である。
		B		B		計画的な企画展の開催により、収蔵資料を効果的に公開している。	特別展を中心に計画的に企画展を行った。展示公開が十分でない収蔵資料の活用をさらに図る必要がある。
		B		B		展示や教育普及事業において、デジタル技術を活かした効果的な事業展開を行っている。	Wi-Fiを導入しQRコードによる展示資料の情報提供を行ったほか、動画配信や申込のオンライン化などを行ったが、双方向性の事業はまだ行っていない。
		B		B		速報展など時節や市民ニーズに即応した柔軟な事業展開を行っている。	大河ドラマに合わせた家康関連展示や、新指定文化財の速報的展示など、計画的かつ柔軟に行った。
2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、知的好奇心を満たすことができる場である。	B	B8人	B	見直し 必要2 不要5 B7	各地域の特色を生かした常設展示が行われている。	各地の文化財や歴史に関する常設展示を残しているが、長年更新されず情報が古い面がある。
		B		B		各分館の地域の人々や担当者の意見や要望が、企画展示等の事業に反映されている。	各分館の担当者と調整して企画展の内容を決定しており、各担当部署や指定管理者が自主事業も行っている。周知の面で課題を残す。

3	学校の学習内容に即した見学・体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	A	A7人 B1人	A	見直し 必要1 不要6 A5 B2	主に小学校3年生と6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが構成されている。	3年生には昔の道具の体験や展示、6年生には遺跡見学や展示解説などを用意している。
		A		A		学校のニーズ等を把握し、見学・体験プログラムの改善に努めている。	学校移動博物館を学年ごとでも柔軟に対応し、各学区の資料や歴史資源の紹介に努めている。
		C		C		デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めている。	子供向けページの作成、双方向性の授業などの検討をしているが実施には至っていない。
4	市民に学びの場を提供している。	C	B6人 C3人	C	見直し 必要3 不要4 B6 C1	来館者が理解を深められるような効果的な講座や展示解説等を開催している。	講座や展示解説は、企画展時や学校長期休暇時中心に開催しているが、定期的には行っていない。
		B		B		レファレンスには丁寧に対応し、適切な説明を行っている。	市民のレファレンスコーナーや資料閲覧スペースは無いが、丁寧な対応、適切な説明を行った。
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験事業を行っている。	A	A3人 B5人	A	見直し 必要2 不要5 A4 B3	展示や講座等と関連付けた体験学習事業により学習の相乗効果が高められている。	銅鏡づくりやアイロン体験など、常設展関連メニューのほか、企画展等の内容に沿ったメニューを心掛けた。
		B		B		幅広い層が学びながら楽しめる体験学習プログラムを開発している。	長期休暇を中心に家族一緒に楽しめるメニューを用意している。一方で大人向けプログラムが少ない。

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数は、本館・分館ともに新型コロナの影響から持ち直している。大河ドラマ関連の特別展・テーマ展で若干増えたが、家族連れ対象の体験学習の日数を減らした影響で、全体では微増に留まる。 ・常設展は展示内容の改善を進めているがまだ不十分であり、ある程度抜本的な更新が必要である。企画展はほぼ計画通り実施することができた。 ・分館の展示については更新の少なさが課題である。ニーズを踏まえながら各地域の特色ある資料を生かした取り組みが必要である。 ・教育普及事業は、講座や展示案内が不定期であること、体験学習に大人向けプログラムが少ないことが課題である。 ・学校連携事業は、基本的に順調に行えている。来館できない学校へのオンラインでの対応が進んでいないことが課題である。
-------	---

博物館協議会からの意見・評価

<ul style="list-style-type: none"> ・収集、保存(保全)、調査研究、教育普及、展示をひとりの学芸員が全て均等に行うには限界がある。人事の関係で配置は難しいことは承知しているが、教育普及は専任の担当を置くなど、人員体制のサポートもしくは改編を行うなど工夫が必要。学校現場の人員不足や長時間労働が問題になっているが、博物館の学芸員も人員不足と多くの仕事を抱えて長時間労働に陥りがちであり、人員の確保は市と協議して進めてもらいたい。 ・音声ガイドなどのUD化が進められないのは、展示が確定していないため敢えてそのような措置をとっているとのことであるが、見学者にとってはその理由も判らず、不便で遅れている施設であるという印象を持たれる。障害者、年配者、外国人など、全ての人が利用しやすいような施設を目指すことがUD化であり、館内全てを同時にUD化しなくても、徐々に対応している姿勢を見せることも重要なメッセージの発信になる。完璧なUD化は無いとまで言われているため、少しずつでも試しながら、これまでより使いやすいという人を1人でも増やすように、すぐにでも始めることが望ましい。 ・常設展の改善や分館の更新・充実など恒常的な課題も少なくないが、本館における展示・教育普及活動(教育施設としての博物館)については、新型コロナ禍の影響が残る中で、ここまで達成してきたことは高く評価されるべきである。「大人向けのプログラム」とひとくちに言っても、高齢者を対象にするか、20代～30代の若年層を対象とするかによって異なるだろう。イベント業者やイベント・プロデューサー、インフルエンサー等への企画の委託なども一案ではないか。 ・大河ドラマに合わせ、興味深い企画展を開催することが出来た。分館については、市町村合併時にどのような位置づけにするかの協議があったか不明であるが、施設の老朽化の報道もあったと記憶しており、存続も含め検討する時期でないかと考える。 ・1について:QRコードによる情報提供や動画配信などが行われ、UD化も予定されているとのこと、今後に期待します。 ・5について:大人向け(幅広い世代向け)プログラムを作ることで来館者の層が変わると思うので実現してほしいです。子どもや親子向けのみの場合、子どもが成長するにつれ足が遠のいてしまう可能性があります。 ・UD化を一層進めてほしい。音声ガイドなども重要であろう。また教育施設としての側面から、子ども向けのホームページや、双方向の授業などの検討も重要であろう。限られた人数での事業を実施することに苦労していることがよくわかるが、ボランティアの活用なども進めてはどうだろうか。また大人(高齢者)向けのプログラムの開発なども重要であろう。
--

今後の方策

<ul style="list-style-type: none"> ・常設展は、内容の更新に継続的に取り組み、併せてUDについて検討していく。 ・企画展は、時節やニーズを押さえつつ、収蔵資料の活用が図られるように実施していく。 ・分館の事業は、各地域の担当者や指定管理者と連携を深め、地域の特色を生かした内容で実施していく。 ・教育普及事業は、家族連れだけではなく、大人向けの定期的な講座等の開催を進めていく。 ・学校連携事業は、必要に応じて各学区の特色を織り交ぜる。また遠い学校とのICT活用を需要をみながら研究していく。
--

戦略指標4 市民協働

- ・地域を特徴づける資料収集と保管
- ・資料データ化と収蔵資料の充実
- ・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R4 目標値	R2 実績値	R3 実績値	R4 実績値	考え方・基準	R4内訳等説明
1	地域団体等と連携した事業の実施件数	件	3	1	4	3	自治会や市民団体等との連携による館内・蛭塚公園・伊場公園を利用したイベントなど(連続するものは1件)	映写会・タケノコ掘り(自治会)、昔話の語り聞かせ(市民団体)
2	市民参加型事業の開催件数	件	2	-	2	2	共同調査、意見聴取型WS、協業などの件数	家康伝承調査事業、蛭塚遺跡の整備を考えるWS
3	逸品陳列開催件数	件	3	0	1	1	外部の店舗や施設から依頼を受けて出張展示を行った件数	目標値を満たさず、周知方法に再考の余地がある。 浜松市三ヶ日図書館(猪久保銅鐸複製品)
4	出前講座等開催件数	件	10	1	8	11	依頼を受けて講座に出向いた件数	サークル、観光ボランティアガイド団体等4件、学校3件、行政機関主催事業の依頼4件
5	他団体共催事業件数	件	5	7	6	5	展示、講座、イベント等。 ※共同の調査研究は含まない。	中日新聞(新聞切抜作品展)、豊橋市自然史博物館(干支展)、文芸大(型紙展示)、お話つむぎの会(旧高山家住宅で昔話の語り)、市教育研究会(社会科自由研究優秀作品展)
6	ボランティア参加延べ人数	人	500	492	442	356	ボランティアの延べ活動人数(研修除く)	目標値未達成であるが、本館の資料点検作業を優先させ、ボランティアの参加が多く見込める体験学習事業の日数を減少しているため想定内である。講座や体験の補助、学校見学の案内や補助、展示ガイド、和綿づくりなどを実施した。
7	ボランティア養成事業開催回数	回	6	6	8	10	講座、報告会、実習等の資質向上に関する事業の開催回数	体験学習の補助、館内展示ガイド、蛭塚公園ガイド、展示資料や体験学習で使用する資料についての学習等を行った。

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R3 自己	R3 委員	R4 自己	R4 委員	判断基準	自己評価の理由等
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	B	B8人	B	見直し 必要3 不要4 B6 C1	ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めている。	【自己】ポスターやHP等で募集し、講座で育成し、体験学習の補助や展示ガイド等を行っているが、人材や内容が固定化している面がある。高齢化も進む。
		B		B		ボランティアにインセンティブ(講座等事業の優先利用や個別サービス等)や企画提案の場を用意するなど意欲向上の取り組みを進めている。	講座や見学会等には運営補助を依頼しながら優先的に参加させている。また、意見交換等を行っているが、本格的な企画提案には至っていない。
		B		B		シティプロモーションを意識した事業展開を進めている。	市民の関心の高い事業(家康伝承調査等)を市民協働で実施した。
2	博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	B	B4人 C4人	B	見直し 必要3 不要4 B5 C2	市民団体等の活動に対する支援を行っている。	依頼を受けて、観光ガイドの研修講師を務めたり、学習への助言等を実施している。
		C		C		社会の課題解決に向けた事業展開を図っている。	障害者等の受入れはソフト面では個別対応しているが、ハード面の対応(音声ガイド、ハンズオン等)は行われていない。

3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	B	B7人 C1人	B	見直し 必要2 不要5	市民団体等に博物館や遺跡でのユニークメニューでの活用を促進している。	自治会のイベントや映写会などに会場を提供している。
		B		B	B7	地域との連絡・調整体制が築かれている。	自治会とは必要に応じて連絡を取り、相談している。
4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	B	B8人	B	見直し 必要2 不要5	分館の事業に対する感想や要望を把握し、課題の改善に努めている。	直接または分館担当者を通じて地域の意向や要望を汲み取っている。
		B		B	B7	分館担当者や指定管理者との定期的な連絡・調整の場を設定している。	年に1回担当者会議を行うほか、随時協議して意向を確認しながら決定している。

自己評価

分析・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・展示解説や体験学習、調査事業など、市民が主体的にボランティア活動や事業に参画する場を設けている。若年層のボランティアも一定数存在するものの、その多くが学生や会社員であることから参画できる日数が限られており、平日の学校団体見学时に主力となる層の高齢化が課題となっている。 ・地域のイベントは新型コロナウイルスの影響も減少しており、出前講座やまちかど逸品陳列も含めて一時期より要望が増えている。 ・各分館では地域に根差した事業が展開されているが、運営主体の取り組みに地域差は生じている。
-------	--

博物館協議会からの意見・評価

<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの募集や養成には、館側の受入れ体制を整えなければ、新たな展開は難しいのではないかと。繰り返しになるが、これだけの事業展開を図るのであれば、ボランティアや市民協働をひとりの学芸員が学芸業務の傍らで実施するには限界がある。事業として充実したものにするには、学芸員に拘泥することなく、地域連携は担当をつけるなど、人員体制の工夫をしてもらいたい。 ・ボランティアを多様な年代、職業、立場から集められるよう、ボランティアにになって欲しい作業や仕事を細分化し、参加しやすくする。講座や見学会などに優先的に参加させたり、勉強会などを開催し、希望者には、参加回数や知識、経験などに応じて認定制度などを設け、意欲の向上を図るなどの工夫をする。展示ガイドや体験学習の補助に加え、見学者に対するホスピタリティに優れたボランティアを来館者に投票してもらおうなどして、評判の良いボランティアを表彰するなど、やりがいや喜びを感じてもらえるような仕組みをつくる。 ・市民協働については、課題はあるものの、おおむね好調な成果と言えるのではないかと。学芸員課程を持つ市内の大学との組織的かつ協定的な連携を強化し、博物館実習等の機会ともあわせて、学生のボランティアによる展示の企画・運営などを模索できないか。また、分館担当者会議が年に1回というのは少ないように思う。2ヶ月もしくは3ヶ月に1回くらいのペースで会議を設けるとか、まとまったかたちでの研修会を設けるなどして、分館担当者の企画・運営に係る知識と認識を高めてゆく必要があるのではないかと。 ・研究・資料整理・登録等複数の業務の中で、出張講座等も実施することが出来ている。業務の優先順があると思うので、回数を急激に増やすことは現実的ではなく、家康伝承のような、市民が興味を持ち易く協力依頼し易い事業を計画することが重要であると考えます。 ・1について:ボランティアは多いほど良いと思うので募集の仕方を再考してみたいか。HPに(可能ならチラシやポスターも)、ボランティアをしている方々のコメントや、実際にどんなことをしているのか、どんな方におすすめしたいのか、などをできるだけ詳しく具体的に示したほうが興味を引き応募しやすいと思います。 ・市民ボランティアの募集・育成・活動を継続的に行っていることは評価できる。ただ現在参加している層のみならず、拡大する努力をしてもいいのではないだろうか(定性1)。バリアフリー化、展示の説明など、障害者や外国人、また子どもにも配慮するなど、工夫によって改善できることがあると感じられる(定性2)。地域との連絡調整を行いながら、行事を行っていることは評価できる(定性3, 4)
--

今後の方策

<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア(特に体験学習の補助)は実働できる人数がやや少ないため、募集の手法やインセンティブを工夫しながら、人数の確保を進めていく。 ・アウトリーチや協働事業については、周知や働きかけを積極的に行うことで、市民による博物館活用の促進を図る。 ・分館や各地域との連絡調整を積極的に行い、ニーズを汲み取りながら連携した事業を進めていく。
--

戦略指標5 情報の発信と公開

・SNSによる情報発信 ・多言語対応ガイドシステム導入 ・観光訪問者への情報提供

定量的評価

No.	内容	単位	R4 目標値	R2 実績値	R3 実績値	R4 実績値	考え方・基準	R4内訳等説明
1	SNS更新回数	回	1,900	379	215	1,936	年度末時点におけるツイッター、インスタグラムのフォロワー数	R3までの更新回数からR4よりフォロワー数に変更。
2	HPアクセス数	件	80,000	-	75,501	85,522	博物館HPのトップページアクセス数。広聴広報課で把握。	10,000件以上増加し目標値を満たしたが、資料紛失に係る報道による影響も一定数考えられる。トップページ以外からの閲覧数は未計測。
3	アップした動画の平均再生回数	回	500	-	642	391	年度内にアップした動画の年度末時点の再生回数の平均値	目標値未達成のため、内容や周知方法を要検討。「講座浜松の横穴式石室」435、「古墳発掘調査報告会」752、「講座浜松地域遺産」211、「講座」ペイトン号」165
4	報道取り上げ回数	回	100	151	84	52	新聞・ラジオ・TV・雑誌等の取り上げ回数	実施効果を考慮し、情報提供先、依頼先を減らしたことにより、目標値は未達成だが想定内である。新聞13回、ラジオ2回、TV8回、雑誌等9回、ネット20回 ※資料紛失にかかる報道を除く。

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R3 自己	R3 委員	R4 自己	R4 委員	判断基準	自己評価の理由等	
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	A	B8人	A	見直し 必要3 不要4	過去の実績やアンケート等に基づき、事業の規模や対象に合った情報発信手段(広報誌、ポスター・チラシ、広告、HP、SNS等)を適切に選択している。	子供向け事業は広報効果の高いチラシを学校を通じて配布するなど、内容により配布先や部数を変えたり、速報性・ニュース性の高いものはインターネットでの広報を強めるなど工夫した。	
		C		C		B6 C1	収藏品検索システム「ある蔵」の、内容の充実と見やすさの改善に努めている。	利用の多い資料をトップページに配するなど、見やすさや利便性向上に努めているが途上である。情報量の増加にも努めているが途上である。
		B		B		B	積極的な報道発表を行い、報道機関を通じた情報発信に努めている。	市政記者クラブのほか、インターネットメディア等にも情報提供を行った。記者が記事にしやすい資料構成などを検討の余地がある。
2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	C	B5人 C3人	C	見直し 必要3 不要4	展示解説やパンフレットなど多言語化への対応を進めている。	常設展の英訳の修正を行ったが、外国語の音声ガイドやパンフレットは、今後展示更新を予定しているため、その後の予定である。	
		B		B		B	観光施設や宿泊施設等との連携を深め、博物館の広域的な周知に努めている。	チラシやパンフレットを配架してもらい、一部ではSNSで相互にフォローするなど連携している。
		B		B		B	地域の魅力を紹介することで、地域に対する関心を高めることができたか。	地域の歴史資源や資料を紹介した。
3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	A	A1人 B7人	A	見直し 必要2 不要5	刊行物(図録、博物館報、博物館だより、博物館情報等)が計画通り発行されている。	計画通り発行した(図録2冊、小冊子2冊、館報、博物館だより3通、博物館情報6通)	
		B		B		B	HP等における事業の動画や資料、収藏品の情報などにインターネットを活用した来館できない人向けの情報提供に努めている。	講座の動画配信を行った。また、中央図書館の「浜松文化遺産デジタルアーカイブ」と連携し、資料の追加公開とダウンロードの準備を進めた。
		B		B		B	SNSでは事業の開催周知だけでなく、日々の活動状況も公開することで、博物館事業への理解が深められるように努めている。	学校移動博物館の様子や販売品の紹介などの情報を発信した。

自己評価

分析・課題

- ・来館者アンケートの結果からは、来館者の情報源はチラシや広報はままつなど、紙媒体の方が依然として多いが、インターネットの情報で訪れる人も増えている。そうした動向や、市のデジタル化・ペーパーレス推進の政策も踏まえると、今後はオンラインによる情報発信に移行する必要がある。
- ・公開されている収蔵品検索システム「ある蔵」は、見やすさ、使いやすさの面でやや使いにくい面が残る。

博物館協議会からの意見・評価

- ・収蔵品システム「ある蔵」は、システム会社と協議して、ホームページ上での「見せ方」や「見やすさ」、「検索のしやすさ」など、改善を進めてほしい。
- ・地域性を考慮しポルトガル語での翻訳を部分的にでも実施するなど地域コミュニティの包摂に取り組んでもらいたい。ポルトガル語の翻訳が難しい場合、浜松市のHICE等、市の他機関との連携を通じて、やさしい日本語を展示に一部応答するなど検討するなど、社会包摂の実現に向けた取組みを期待したい。
- ・当地域に定住する外国人の多様性から考えると、英訳の修正だけでなく、外国語の音声ガイドやパンフレットの作成が急務であると考えられる。大河ドラマの影響で、本市の歴史や観光資源が注目されているため、これまで博物館に感心のなかった層を開拓するチャンスである。展示物をやさしい日本語でわかりやすく解説することによって、外国人だけでなく、子どもにとっても歴史が身近なものになる可能性がある。
- ・紙媒体での情報発信を最低限にし、SNSなどの発信手段に大胆にシフトしてみてもどうか。
- ・市のデジタル化・ペーパーレス推進の政策を踏まえるとはいっても、SNSのフォロワー数のX(旧twitter)が880、インスタグラムが1192しかない。動画の再生回数も平均では400に満たない現状では、「今後はオンラインによる情報発信に移行する」と言い切ってしまうのは時期尚早ではないか。
- ・「ある蔵」から閲覧できる資料は、拡大すると画像が粗くなりがちである。拡大することで、むしろ細部まで詳しく見るができるように改善していただければと思います。
- ・効果的な情報発信をする努力がなされている。急激なSNSフォロワーや、ホームページアクセスの増加は、難しいと思うが、更新をしなくなれば、ますますアクセスが少なくなってしまうので、他業務もあり繁忙であると思うが、定期的な更新を継続してほしい。
- ・検索システムの更新には多大な労力を要すると思われる。計画的に進めていただきたい。
- ・1～3について:情報発信は十分されているようですが、博物館が身近になかったり、未成年の子どものいない一般市民の目線で見ると、博物館についての情報に触れる機会があまりないように感じます。もし、今以上に多くの人に活用してもらいたいのであれば改善する必要があるようです。具体策が思いかびませんが、県内県外の類似施設の情報発信の仕方や反応を調査してみるのも良いと思います。
- ・ちらしやホームページの活用に努めていることは評価できるが、思い切ったリニューアルをはかるなど、博物館の魅力をより効果的に伝えられる表現方法を模索してはどうだろうか(定性1)。市内外の幅広い層へのアピールにはホームページの活用が効果的であると考えられる(定性2)。図録や小冊子は大変興味深く、高く評価できる。

今後の方策

- ・情報発信については、来館者アンケートの分析でチラシや広報、新聞等を見ての来館がまだ一定量を占めるため、当面はオンラインでの発信との両輪で行っていく。
- ・SNSでの発信内容の多様化等の工夫によってフォロワーを増やし、オンラインの発信力を高めていく。
- ・「ある蔵」による収蔵資料情報の公開について掲載情報の充実と利便性の向上に努めるが、システム上高精細画像の掲載やダウンロードが難しいため、「はままつ文化遺産デジタルアーカイブ」での画像閲覧やダウンロードと役割を分担し、その周知を進める。
- ・多言語化は、展示の更新状況に関わらず、進められるところから順次検討していく。